**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第６５回　（２０２０年７月１２日）**

**・第６５回の勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」３８頁**

**ヴィシュワスとバクティ（神への信仰と神への愛）**

ヴィシュワスとバクティ、神を悟るにはこの２つが必要です。ヴィシュワス（vishwas）神への信仰については前回たくさんの例を引いて説明しました。今回はバクティ（bhakti）神への愛について話をします。

**人生の目的**

シュリー・ラーマクリシュナの考えでは、人生の目的は神（真理）を悟ることです。ですからヴィッディヤー・シャーゴルとの会話も「どのように神を悟るか」というテーマで進行しています。しかし、会話の相手であるヴィッディヤー・シャーゴルの人生の目的は悟りではなく、どのように社会をよくするかでした。彼は貧しい人に金銭的援助を行い、勉強がしたくてもできない人を教え、困っている人を助ける努力をしていました。

当時のインド社会には様々な問題がありました。たとえば女性は社会における地位が低く、自由が少なくて勉強ができる環境もありませんでした。幼い時に結婚する風習があり、若くして未亡人になったら、ずっと未亡人としての厳しいルールを背負って生きていかなければなりませんでした。これは迷信のようでもありますが、学校に行かないほうがいい、長い髪はだめ、靴を履いてはならない、服の色は必ず白、油を使ってはならない、祭りには参加できるが祭りの準備をしてはならない、などなどです。ヴィッディヤー・シャーゴルは慈悲深い人だったので、女性の生活をどのように改善し地位を向上させるかに腐心しました。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダにもその考えがありましたが、一番最初にインドの近代化に貢献した人は、ラーム・モーハン・ローイ［Ram Mohan Roy, 1772～1833；近代インドの父とされる人］とヴィッディヤー・シャーゴルです。

ヴィッディヤー・シャーゴルはサンスクリットの学者で、神についてもたくさん勉強しましたが、その結果「神はおられるが、神を悟ることは不可能だ。だったらそのための実践をしても意味がない。それより社会で困っている人たちを手伝ったほうがいい」という考えに至りました。もちろんそれは良いことです。しかしシュリー・ラーマクリシュナの考えでは、人生の目的は神を悟ることでした。そうしなければ人生の根本的な問題──苦しみ、悲しみ、心配、恐れ、無知……──はなくならないからです。

他者を手伝うのは良いことです。それは肉体のレベル（例：病気の人を治す、飢えを癒す）、心のレベル（例：いのちの電話）、知性のレベル（例：学問を教える）でできますが、最高の手伝いは霊的なレベルの手伝いです。たとえば時間的なことを考えてください。身体のレベルで飢えを癒しても人々はまたすぐに飢えます。お金をあげてもまたあげなくてはなりません。心のレベルや知性のレベルの助けは身体のものより長続きしますが、それでも今生までです。しかし霊のレベルで助けると、それが来世まで続きます。それだけでなく、悟ります。霊のレベルで助けられた人には悟りも可能です。彼は再生せずに解脱します。自分の本性がサット・チット・アーナンダ、つまり絶対の存在、絶対の知識、至福である、と経験するのです。

普通の人の人生の目的は楽しみと喜びの追求です。そしてその最大の楽しみと喜びを得るのがすなわち神の悟りなのです。悟りとは、自分の本性と神の本性は同じサット・チット・アーナンダだと知ること、神は自分の内に魂の形で存在していると知ることです。それによって、最大無限の喜びの状態を得るのです。その状態が至福です。

そしてその状態になると、自分が持っていないものが全て「自分の持ちもの」になります。以前はこれもない、あれもない、平安もない、幸せもないと思っていたのに、「すべてはある」という考えに変わります。

**悟りの状態**

yogaとkshemaというサンスクリット語があります。kshema（クシェマ）は「今あるものがずっとあって欲しい」、yoga（ヨーガ）は「今ないものが欲しい；もっと欲しい」（ちなみにYogaという言葉は色々な意味で使われます）という意味です。

普通の人の人生の目的はヨーガとクシェマです。①あるものはずっとあったほうがいい、②ないものが欲しい、もっと欲しい──しかしそれらは目的であると同時に、そのまま私たちの問題にもなっています。楽しみと喜びを追求しても、それと同時に悲しみ苦しみもやってくるからです。楽しみや喜びだけ欲しい、というわけにはいきません。一時的世俗的な楽しみを追求すると、まるで双子の兄弟のように、苦しみ悲しみも共にやってくるからです。

しかし悟ると、ヨーガとクシェマの考えがなくなり、欲望や願いが生じなくなります。なぜなら悟りが最高のものですから。悟り以上のものが欲しいという考え自体あり得ないのです。最高のものを持っていたら、それに比べてすべてのものは、小さいもの、大事ではないもの、重要ではないもの、という考えに変わるでしょう？

バガヴァッド・ギーター第６章２２節を読んで下さい。

*これに勝るものはないという至高の境地に達すれば、たとえいかなる困難に遭おうとも、ヨーギーの心は少しも動揺することがない。(6-22)*

苦しみの状態に入っても苦しまない（＝*たとえいかなる困難に遭おうとも、ヨーギーの心は少しも動揺することがない*）ことが悟った人のしるしです。あるとき、トゥリヤーナンダジーは背中を手術しなければならなかった。それは深くメスを入れる手術でした。私たちはちょっとした切り傷でも痛いと思うでしょう？　しかしトゥリヤーナンダジーは手術中も執刀医と会話をしていたというのです。それほど心のコントロールができていました。私たちはなぜ痛いかというと、心がそこに向くからです。だから痛いという感情が表れます。しかし心がなかったら問題はありません。

たとえば、日中はあまり気づかないけれども夜になると痛む、ということがありませんか？　昼間は人と会話をするし仕事をしているから心が痛みに向きにくいのです。しかし夜は仕事をしないので、心の１００パーセントがそこに向きます。夜になると痛むのは、それが原因です。身体は薬で治すことができますが、ときどき身体より心の痛みの方が大きいこともあるかもしれませんね。悟った人は、身体のレベルの苦痛も心のレベルの苦痛も、それがあっても常に静かな状態なのです。「静けさ」については、先週（２０２０年７月４日）のバガヴァッド・ギーターの講話でも話をしました。

トゥリヤーナンダジーは悟った人でしたから、完全な意識のもとで、手術を受けることができました。まとめると、悟ると欲望がなくなります。そして苦しみ悲しみの状態になっても心は静かです。

欲望についてさらに付け加えると、静かな湖が波立つのはどういう時ですか？　風が吹くときです。私たちの心は湖です。私たちの本性は静けさなので心の湖は本来静かなのですが、波立つときがあります。それは欲望の風が吹くときです。パタンジャリのヨーガ・スートラ（第1章2節）「チッタ・ヴリッティ・ニローダ」のヴリッティは波という意味ですが、悟った人にはそれがありません。心に欲望の風が吹かないからです。だから心は静かです。

まとめると、①悟った人も、苦しみは苦しみとしてあるが、しかしその影響はないのです。②また悟った状態より楽しいものはないから、それに対する欲望も出ません。シュリー・ラーマクリシュナの考えでは、人生の目的はその状態を得ること、すなわち悟ることです。

**私たちの状態**

私たちは、至福をイメージすることができません。だからちっぽけなことで喜び、最大の喜びである至福を探そうともしないのです。至福は本当は自分の中にあります。だから探すのにお金もかからないし、どこかに出かける必要もないのですが、私たちはジャコウジカのように、至福の源を探そうとして外のすべての楽しみを追求します。至福が自分の中にあると知らないからです。

本物は中にあり、外のものは中の反射です──あなたが満月をとても好きだとします。空がきれいだったら、満月は湖面に美しく反射するでしょう。では、あなたが満月を愛でようと思ったら、湖に反射している月を見ますか？　本当の月を見ますか？　本当の月でしょう？──しかし本物についてのイメージがない人々、反射についてしかイメージがない人々は、反射した月で満足することでしょう。湖面が月光で照らされると、魚はその明るさを求めて遊びに出ます。彼らにとっては反射の光で十分なのです。私たちもそうではありませんか？　外のすべての楽しみは、中の本物の反射なのに、私たちは反射で満足しています。ですが本当のものは、どれくらい素晴らしいか！

「神が創ったものは素晴らしい」と人は言います。ですが「創造者はさらに素晴らしい」と言う人は稀です。景色を見て美しいと思い、それを楽しんでも、その時１回でも「この景色がこれだけ美しいのなら、景色の創造者はどれくらい美しいか！」と思うことはありますか？　私たちが愛するのは息子、娘、旦那さん、奥さん、友達、物、車、建物、食べ物です。それを愛し、それを楽しみます。しかしそれらは至福の反射にすぎないのです。まるで私たちは湖の魚です。

ある時シュリー・ラーマクリシュナが言いました、「コルカタの人々の視線はいつも下を向いている。上を見る者はとても少ない」──私たちも、いつも目のレベルより下を見ていませんか？──目と心の関係を考えると、これはシンボル的な話だと分かります。普通、人の心はお腹から下のチャクラ（ムーラーダーラ、スワーディシュターナ、マニプラ）、つまり排泄と生殖と食事を司るチャクラの間で動いています。霊的実践においてチャクラのことを考えると、その第一歩はそこからアナーハタ・チャクラ（胸のレベルのチャクラ）まで心を上げることです。私たちは時々は良い瞑想によって、素晴らしい賛歌を聴いて、心がそこまで上がるかもしれませんが、それは安定せず、またすぐ下に下がります。ですから取り掛かるべき最初のことは、（最終の）サハスラーラのことは考えずに、どのようにアナーハタまで心を上げるかなのです。それが霊性の闘い（spiritual struggle）、霊的実践の最初の目的です。

**📖読み**

**『福音』３８頁下段　後ろから３行目**

*師はつづけられた、「信仰と帰依です。人は信仰と帰依によってらくに神を悟ります。*

*The master continued: “Faith and devotion. One realizes God easily through devotion.*

シュリー・ラーマクリシュナは、信仰（*faith*）について話してきましたが、次にバクティ、神への愛の話を付け加えます。信仰がなければ、神への愛もないからです。バクティは何と訳されていますか？

（参加者）「帰依」

「帰依」という日本語の意味が私にはよくわからないのですが、帰依という言葉で「神への愛」というイメージがわきますか？　英語訳では*devotion*ですがどうでしょう？　*devotion* は神への愛ではないですか？　神への愛のほうがイメージがわきますね。

OK、それで悟るために、２つのものが要ります。神への信仰、神への愛です。そして、神への愛について、「*One realizes God easily through devotion.*」と言っています。日本語で？

（参加者）「人は信仰と帰依によってらくに神を悟ります」

原著ベンガル語にも、英語訳にも、信仰とは書いてありません。*devotion*だけです。日本語にしたとき、信仰も合わせて翻訳したのですね──もちろん問題はないし、間違いではありません。また、信仰がいらないというわけでもありません、両方必要ですから。しかし、これからバクティについて説明するのですから、強調のために*devotion*だけとなっています。

さて、ここの大事なポイントは、「バクティ・ヨーガは神をらくに悟る」ということです。どうしてそう言えるのか、本当にらくなのか、それを説明しなければなりません。

**バクティ・ヨーガ**

神を悟る方法にはバクティ・ヨーガの他に、カルマ・ヨーガ、ラージャ・ヨーガ、ギャーナ・ヨーガがあります。

カルマ・ヨーガは働きのヨーガです。①非利己的に仕事をする（見返りを期待しない、もらうより与えることを考える、仕事・仕事の目的・仕事の結果に執着しない）、②自分がしていると考えずに神の道具となって仕事をする、というのが方法です。しかし普通の人は、たとえば家族のためという動機があれば働くやる気が出ても、「無執着になって、どのように仕事へのやる気を得るのか」と考えます。それに「私が仕事をしている」「私がオフィスに行く」「私の能力」といつも私、私と言っています。そのような人に、「神の道具となって仕事をしてください」と言ったらどうなりますか？　あなたを変人か心の病気だと思うでしょう。だったらその人にはカルマ・ヨーガの実践はとても難しいものになります。

ラージャ・ヨーガは瞑想のヨーガです。長い時間の瞑想が必要です。それも居眠りを合わせてではなく、ディヤーナ、つまり真理に集中しつづけて、６時間８時間と座るのです。普通、１つのものに集中しつづけるのは数分でも難しいことです。他にも、場所のコントロール（うるさい場所に入らないなど）、食事のコントロール、ヤマ・ニヤマという道徳的実践、アーサナ、プラーナーヤーマ、プラティヤーハーラと8段階の実践があります。普通の人は２階にも行けません。なのに８階に行こうというのですか？　それにラージャ・ヨーガの実践には特別な身体と心が必要です。それは無理なようではありませんか？

ギャーナ・ヨーガは識別のヨーガです。何が一時的で何が永遠か、何が有限で何が無限か、何が非実在で何が実在かを常に識別します。しかし普通の人はまったく識別をしません。理由は、１つには永遠や無限に興味がないから、もう１つは一時的なもので十分満足だからです。その人は身体意識がとても強いです。魂意識がちょっと出たとしても、暑い、寒い、お腹がすいた、痛い、などですぐに身体意識に戻ります。窓を開けてください、エアコンをつけてください、扇風機を回してくださいと言うのはどうして？　身体意識が強いですから。

バガヴァッド・ギーターが言う理想的な状態は何ですか？　（第２章１４節の）シートーオシュナ・スカ・ドゥッカダーハ、「寒暑苦楽に惑わされない」ということです。ですが普通は身体意識が少ないサマットワ（samatva：静けさ、安穏）の状態は得られるものではありません。昔は身体が強壮で、身体意識も今ほど強くありませんでした。だからラージャ・ヨーガの実践も可能でした。ですが現代の身体意識がとても強い状態では、ラージャ・ヨーガの実践はほとんど無理のようです。

言うことは、「これら３つのヨーガに比べて、バクティ・ヨーガは実践がらく」ということです。何と比べてらくか、という説明は必要です。そうしないと単純に「バクティ・ヨーガの実践はらく」と捉える人もいるでしょうから。シュリー・ラーマクリシュナは、「そんなに楽ではない。ですが他のヨーガと比べたららくです」と言っているのです。

他のヨーガには、その実践のために必要な「条件」があります。カルマ・ヨーガの条件は、健康な身体、神を思う心、エゴ（私意識）や利己的な考えが少ない、ということです。ギャーナ・ヨーガの条件は、清らかな心、身体意識が減っている、ということです。ではバクティ・ヨーガの条件はなにかというと、愛です。

愛は誰にでも理解できます。経験で、それが何かを知っているからです。それだけでなく、愛は私たちがすでに持っているものです。だから何の準備の必要もなく、ただそれを使うだけなのです。バクティ・ヨーガがらくな理由は、実践に必要なものをすでに持っていて、あとはその向きを変えるだけ、ということです。世俗的で一時的なものに向かっている愛を、神に向けるだけ。考えを変えるだけ。振る舞いを変えるだけ。全ての愛の中心を神に向けるだけ。すると家族親戚の中にも神がいます、仕事も神の仕事、すべてが神につながっている状態、となります。

バクティ・ヨーガのやり方はそれだけです。中心を変える、基準を変えるだけ。他に何の準備もいらない。実践もいらない。長い瞑想もいらない。特別な生活スタイルも必要ない。ヤマ、ニヤマ、呼吸法（プラーナーヤーマ）もいらない。ただ１つの中心、人生の中心が神になる。そうするためにあちこち行く必要もない。神は自分の中にありますから。ですからカリ・ユガでバクティ・ヨーガが一番らくと言われるのです。聖者ナーラダはいつも神に自分のすべてを向けていました。すべての中心が神でした。

犯罪者にも家族がいます。警察が血眼になっても見つからない犯罪者が、夜になって、自分の家族に会うために家族の顔を見にきます。そのとき警察は彼を逮捕します。いかにも悪い人に見え、心が残虐な犯罪者でも、愛を持っているのです。2年、3年会ってない奥さんや子供たちに会いたい、という一心で、逮捕覚悟で顔を見に行くのです。それほど愛は、皆にあるものだということです。だからバクティ・ヨーガは「らくに悟る」と言えるのです。愛は自然的なものですから。

**バクティ・ヨーガの障害**

しかし言うほどらくではありません。バクティ・ヨーガの障害物は「世俗的なサムスカーラ」です。私たちは世俗的なサムスカーラが強く、それに対する愛が強いです。だから神について少し考えることができても、またすぐ世俗的なものに戻ってしまいます。神に安定して向けることができません。だから進みません。

**・📖Ｐ３８後ろから２行目**

*は、愛の法悦によって悟られるのです」*

*He is grasped through ecstasy of love.”*

**Ecstasy of love（バーヴァ、愛の法悦）**

「*ecstasy of love*」は何と訳されていますか？

（参加者）「愛の法悦」

サンスクリット語ではバーヴァ（bhāva）です。バーヴァは前後関係によって、心の様々なムードを意味しますが、バクティ・ヨーガでは*ecstasy of love*という特別な状態を指します。

なぜecstatic loveを使うのでしょうか？　なぜなら愛には浅いものから深いものまでいろいろレベルがあるからです。相手についてどれくらい知っているか、どれくらいコミュニケーションをとっているか、シェアしているか、助け合っているかに応じて、友人でも、家族でも、愛のレベルがあるでしょう？　私たちの神への愛もそうです。私たちは神を好きでも、愛していても、その愛のレベルは各々ばらばらではありませんか？　浅い愛、深い愛、もっと深い愛、もっともっと深い愛、そして愛の法悦（ecstatic love）──それが一番の愛です。

ではecstatic loveは、どれほどのものなのでしょうか？──水の中に魚がいます。水を抜きます。すると魚は生きられません。死んでしまいます──それがecstatic loveの状態です。イメージできましたか？　私たちはどうですか？　人生に神がいないとその魚のようになりますか？　神がいないと生きることができないという状態になりますか？　私たちは神のことを考えずに長い時間を過ごせています。

ナーラダと神の有名な物語があります。

聖者ナーラダにうぬぼれが生じ、「私はこの宇宙で一番の神様の信者だ」と思うようになりました。もちろん心で思うだけで、口に出して言っていません。しかし神は心中をご存知です。

話がそれますが、シュリー・ラーマクリシュナも信者の心の中が読めましたし、弟子たちも読めました。あるときトゥリヤーナンダジーの従者であるお坊さんがふと、「私はずっとお世話をしてきた。しばらくの間ヒマラヤに行って瞑想を実践したほうがよいのではないか」と思いました。するとトゥリヤーナンダジーが突然言いました、「OK、行きたいなら行ってください。私はあなたを全く必要とはしていない」。従者は心で思っただけでした。しかしトゥリヤーナンダジーはすぐそう言ったのです。ちょっと怖いではないですか？　心が読める人の近くにいるのは。

コルカタの学生だった若者が、シュリー・ラーマクリシュナについて聞き、会ってみたいとドッキネッショルに向かって出かけました。その途中、突然「私の心は世俗的なものでいっぱいだ。それを見られたら恥ずかしい」という思いが浮かび、引き返してしまいました。シュリー・ラーマクリシュナが亡くなったあと、彼は会わなかったことをとても悔やんでいました。その人はブラフマーナンダジーからイニシエイションを受けましたが、そのことを泣いて後悔しているのでブラフマーナンダジーがなぐさめていると、突然ブラフマーナンダジーの態度が変わり、シュリー・ラーマクリシュナが座っているヴィジョンが見えたのです。

シュリー・クリシュナもナーラダの心に少しうぬぼれがあるのがわかりました。ナーラダは尋ねました、「師よ、宇宙で一番の信者は誰ですか？」。シュリー・クリシュナは「〇〇世界の△△という農夫が一番の信者です」と答えました。ナーラダとしては自分の名前を言って欲しかったので失望しましたが（笑い）、それは押し隠して、「そうでしたか。私はその偉大な方に会いたいです」と言いました。居場所を教わると、すぐにその人の元に行きました。ナーラダはすぐに行くことができます。

農夫には大家族がいて、大農園での仕事がありました。彼は朝から晩まで仕事、仕事でした。彼は一番の信者であるのに、その状態では神のことは考えられないはずだとナーラダは思いました。24時間のうちで彼が神のためにすることは、寝る前に1回だけ集中して神のことを思い、神にプラナームすることだけでした。ナーラダは帰ってそのことをシュリー・クリシュナに報告しました。そして、なぜその人が一番の信者なのですかと尋ねました。シュリー・クリシュナは何も答えませんでした。

しばらくして、シュリー・クリシュナがナーラダに次のようなお願いをしました、「ポットのふちまで油を入れて、それを持って世界を1周してください。でも絶対に油をこぼさないように。できますか？」。ナーラダは「できますよ」と言って、とっても気をつけて、ゆっくりと世界を１周し、そして1滴もこぼさずに戻りました。シュリー・クリシュナは「1滴もこぼさないなんて素晴らしい！　ご苦労様でした」ととても褒めてから、「でもそのとき私のことを思い出していましたか？」と尋ねました。ナーラダは内省して、「いえ、思い出してはいませんでした。なぜならすべての心を『油を１滴もこぼさない』ことに集中していましたから」。シュリー・クリシュナは言いました、「今思い出してください、あの農夫を。彼にはすべき仕事がいっぱいありました。家族の世話もしていました。ですが毎日絶対に神様のことを思い出していました。誰が一番の神の信者でしょう？」

**Ecstatic loveの状態**

いっぱい仕事をしても、神のことが潜在意識に入っていれば、その人が神を忘れることはありません。世俗的なことをしていても、潜在意識に神がいる──それがecstatic loveです。もう１つ、神以外の考えはない、というしるしもあります。私たちはどうでしょうか？　神の祭壇の前に座って、神が目の前におられても、心は神から動いて一時的なものに向いたりしていませんか？

またecstatic loveの状態では神以外のすべての意識がなくなります。私たちは場所や時間の影響を受け、どこにいるか、今何時かという意識が生じます。しかしecstatic loveの状態では、周囲の環境や時間の概念は忘れ去られます。いえ、忘れるのではなく、それらに対して無意識になるのです。だからecstatic loveから戻ってくると、この場所はどこか、時間はいつかがわからなくなります。『福音』を読むと、シュリー・ラーマクリシュナが何を話しているか、誰がいるか、場所はどこか、時間はいつかの意識がすべて無くなって、神意識だけになっていることがわかります。

シュリー・ラーマクリシュナの特徴は、ecstatic loveの状態が自然で普通の状態だということです。しかし私たちは、たくさんのタパッシヤ（実践）をしてやっとほんの少しだけ神について集中して考える（ディヤーナ）ことができるようになります。理想的な愛の状態であるecstatic loveに達するまでにはどれだけ実践が必要か、考えてみてください！

ecstatic loveの条件は３つ──①神よりも大事なものがあったら不可能です。②神よりも愛しているものがあったら不可能です。③神よりも楽しいものがあったら不可能です。神はとても嫉妬深いお方です。この条件が満たされていなければ、神を悟ることはできません。

羅針盤の針は常に北という方角を向きます。私たちも、シュリー・ラーマクリシュナも、いつも1つの方向を向いています。しかし前者の針は世俗的なものに、後者の針は神に向きます。両者の違いは針の向きだけですが、大きな違いです。

ecstatic loveに至ると、すぐに神を悟ります。シュリー・ラーマクリシュナは、そこから強引に心を引き戻して私たちに教えているのです。

次に出てくるラーム・プラサード作の賛歌は、そのことを歌ったたいへん意味の深い賛歌です。次のクラスではそれについて説明します。

まとめます。

・神を悟るという目的で実践をしてください。

・（水がないと生きられない魚のように）神がいなければ生きられない状態になると、すぐに神を悟ります。

・それがecstatic love（バーヴァ、愛の法悦）です。

**＜Q＆A＞**

Q）（映像から聞き取れないが、至福についての話か）

A）私たちはそれを見ることができないですから、悟った人の話を信じてください、それ以外方法がないです。

聖典を勉強して、神の存在があると聖典の中にもあります（とか）、悟った人の話、たとえば『ラーマクリシュナの福音』にもあります（とあったら信じてください）。なかったら、どうしてその状態に入っています？　それは病気ではないでしょう？　サマーディは病気ではありません。どうしてそれほど心の楽しみの状態となるか、どうしてそれができているか（は悟った人や）バガヴァッド・ギーターも言っていますね。その状態が出ていますから、それが証明でしょう？　そのものを悟ったからその状態が出ていますと聖典の中に書いてあります。それから、イエスのことを信じて、シュリー・ラーマクリシュナのことを信じて、シュリー・クリシュナのことを信じて。それで実践します。

セオリーだけでなく、本当の例もあるでしょう？　至福の状態です。あるときある人がアドブターナンダジーに尋ねた、「あなたはシュリー・ラーマクリシュナと長年一緒に住んでいましたね、シュリー・ラーマクリシュナはどのような人だったのですか？」。その人はスワーミー・ヴィヴェーカーナンダとは会ったことがありましたが、シュリー・ラーマクリシュナのことは知らなかった。アドブターナンダジーは、「あなたはスワーミー・ヴィヴェーカーナンダに会って、どんな印象でしたか？」「おお、近くにいくと、とってもとても喜びの状態になります、so much joy！ so much joy when I’m near swamiji」そう答えました。なぜならスワーミージー（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）の中にいっぱい至福がありますから。だから周りの人も、その影響で喜び。アドブタ―ナンダジーの答えは「シュリー・ラーマクリシュナもその喜びです。しかしヴィヴェーカーナンダよりの１００倍の至福の状態です」。それが証明でしょう？　それがありますから（実践）できる。そのことです。

（20200712『福音』勉強会　以上）

**＜講義後の賛歌奉献＞♪Tumi Brahma Ramakrishna**

**＊この曲のメロディーは、協会から出ているCD『Sri Ramakrishna Vandana』3曲目と同じです。**

（歌詞）

Tumi Brahma Ramakrishna tumi Krishna tumi Ram;

Tumi Vishnu tumi Jishnu prabho Vishnu pranaram;

Tumi adheya adhara tumi Brahma nirakar;

Tumi nara rupadhara vijita-kanaka-kam;

Apara karuna-sindhu tumi deva dina-bandhu;

Jache Indu kripa-bindu charane kari pranam.　(Bengali)　　-Sarat Chandra Chakravarty

（訳）

あなたはブラフマン、ラーマクリシュナ、あなたはクリシュナ、あなたはラーマ、

あなたはヴィシュヌ、あなたは維持者、主ヴィシュヌ、生命（主）ラーマ、

あなたはささえる者であり、ささえられる者、あなたは形なき霊、

しかも、あなたは人の形をとった、あなたは金と欲望の征服者。

無限の慈悲の大海である、主よ！　あなたはいやしい者の保護者、

恩寵のしずくを願い求めインドゥはあなたにひれ伏すのです。

（ベンガル語）　作：シャラト・チャンドラ・チャクラヴァティ